

京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰

その他のタイトル	Chinese Philosophy Course in Keijo Imperial University and Fujitsuka Chikashi
著者	李 曉辰
雑誌名	文化交渉 : Journal of the Graduate School of East Asian Cultures : 東アジア文化研究科院生論集
巻	1
ページ	275-286
発行年	2013-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/9865

京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰

李 曉 辰

Chinese Philosophy Course in Keijō Imperial University and Fujitsuka Chikashi

LEE Hyojin

Abstract

This paper explores the history and character of Chinese Philosophy Course in Keijō Imperial University, focusing on Fujitsuka Chikashi (1879-1948), a professor at Keijō Imperial University. Keijō Imperial University was Korea's first modern University, and long the only government university in Korea during the colonial period. The students of university conducted research under a variety of top-class scholars, which led to modern scholarship of Korea. Fujitsuka Chikashi was born in 1879 in Miyagi Prefecture. He studied Chinese Philosophy in Tokyo Imperial University and graduated in 1902. He stayed in Korea between 1926 and 1940 and was a professor of Chinese Philosophy and studied Kim Jeong-hee (1786-1856) who was a great scholar of bibliographical Study in Qing Dynasty. He was the only professor of Chinese Philosophy in Keijō Imperial University, but also he left lots of great works in the field of Chinese Philosophy. He is a key-person in order to understand the education of Chinese Philosophy in modern age of Korea.

Key words : 京城帝国大学、藤塚鄰、支那哲学講座、『清朝文化東伝の研究』、金正喜

はじめに

京城帝国大学は、東京・京都・東北・九州・北海道の各帝国大学に続いて第六番目に建てられた帝国大学であり、日本の外地における初めての帝国大学である。現在のソウル大学の前身となった京城帝国大学は韓国最初の総合大学であり、また戦前における韓国唯一の大学でもあった。

京城帝国大学1924年（大正13年）、予科が開校され、1926年（大正15年）に本科が開設されて法文学部と医学部の二分科として発足した。初代総長は、東京帝国大学教授で、中国史・中国哲学研究者の服部宇之吉が任命された。服部は赴任時の挨拶で「東洋文化研究ノ権威トナルト云フコト」が他の帝国大学とは異なる京城帝国大学の使命であると宣言している。こうして初期の法文学部の講座は、「朝鮮語学・朝鮮文学」講座を二つ開設するとともに、「支那哲学」および「支那語学、支那文学」講座を設置し、東洋文化研究という使命に相応しいカリキュラムが立てられた¹⁾。

京城帝国大学の開校と同時に支那哲学講座を担当したのは近代日本の中国哲学研究者、藤塚鄰（ふじつか・ちかし、1879-1948）である。彼は1879年岩手県で生まれ、1908年7月、東京帝国大学の哲学科（支那哲学専修）を卒業した。その後、名古屋の第八高等学校教授を経て、1926年4月、京城帝国大学発足とともにその教授となる。1930年（昭和5年）9月には京城帝国大学法文学部長となり、1940年（昭和15年）4月に京城帝国大学を退いて日本に戻るが、同年11月には名誉教授を授与されるなど、京城帝国大学において大きな影響力を有した人物である。

また、藤塚は京城帝国大学で講義を行っていた1936年（昭和11年）4月、金正喜（秋史、1786-1856阮堂とも号す）に関する資料を発掘するとともに詳細な研究を進め、論文「李朝に於ける清朝文化の移入と金阮堂」によって東京大学の文学博士学位を取得した。この論文はのちに『清朝文化東伝の研究——嘉慶・道光学壇と李朝の金阮堂』（国書刊行会、1975年）として出版されている。また、彼が韓国で集めた資料、とりわけ金正喜の資料は現在、韓国に寄贈されている。

このように、藤塚は、京城帝国大学教授として韓国学術界における中国哲学研究を主導し、近代韓国における中国哲学研究に多大な影響を与えた。また、『論語総説』（弘文堂、1949年）などの優れた著作を残し、当時、社会的影響力だけではなく、学問的価値においても近代学術推進のキーパーソンであったといえよう。

しかし、これまで藤塚に関する研究はあまり行われていない。同じく京城帝国大学教授であった小倉進平や高橋亨の研究に比べると非常に少ないのである。また、韓国においては、藤塚は金正喜研究者として知られ、その学問や研究活動についてはさほど注意されていない。

1) 服部宇之吉「京城帝国大学始業式に於ける総長訓辞」『文教の朝鮮：京城帝国大学開学記念号』6、朝鮮教育会、1926年。

そこで本稿では、散在している関連資料を収集・整理し、藤塚の生涯と関連人物を紹介し、藤塚がどのような経歴の持ち主であったのかを探ってみる。また、京城帝国大学で行った研究と講義を検討し、藤塚の受講生たちの卒業後の動きから、戦後韓国における中国哲学研究の流れの一端を窺うことができるように思われる。こうしたことを通して、藤塚が韓国で行った研究とその意義を考察し、彼を中心に行われた植民地朝鮮における中国哲学教育の様相を考察する。

一 藤塚鄰の生涯²⁾

藤塚は、1879年（明治12年）岩手県の佐々木家で生まれたが、1892年（14歳）から宮城県にある鹽竈神社の祠官藤塚家に移り、1906年（昭和39年）に入籍された。仙台の第二高等学校卒業後、東京帝国大学に入学し、支那哲学を専攻した藤塚は、当時教授であった星野恒（1839-1917）から『皇清経解』の研究および利用について教わった。この時期を通じて藤塚は清朝考証学および経学の文献的研究の基盤を作ったのである。星野以外にも、中国文学の塩谷温（1878-1962）や中国哲学の宇野哲人（1875-1974）などからも影響を受けた。

藤塚は、1909年（明治42年、30歳）東京帝国大学を卒業し、同大学院に進むが、半年で退学して1909年8月から名古屋の第八高等学校の漢文講師になる。この時藤塚から薦められ中国哲



【写真1】昭和18年頃の藤塚鄰³⁾

2) 生涯は「藤塚鄰博士年譜」（「座談会 先学を語る — 藤塚鄰博士 —」『東方学』第69号、東方学会、1985年）、藤塚明直「服部宇之吉先生と父藤塚鄰」（『斯文』第58号、斯文会、1969年）および「藤塚鄰의 삶과 학문」（김채식『秋史研究』第3号、秋史研究会、2006年）を参考して作成された。

3) 「座談会 先学を語る — 藤塚鄰博士 —」から抜粋。

学の道に入ったのが加藤常賢(1894-1978⁴⁾)であった。第八高等学校に在職していた藤塚は1921年(大正10年、43歳)、官命により、清朝経学研究のため10月から一年半ほど中国に在留することになる。藤塚は、毎日のように北京の琉璃廠書肆に通っていたある日、朴斎家に関する記録を読み、興味を持った。1923年日本に戻ってきた藤塚は、文部省開催の漢文科教授会議に出席するため東京に行く際に服部から新設する京城帝国大学の支那哲学講座を担当してほしいという勧誘を受けた。さすがすぐには決心がつかなかった藤塚は、一ヶ月後服部を訪ね一緒に行く意向を伝えた。決意を固めた藤塚は、第8高等学校を辞任し、1926年(大正15年)4月21日釜山に到着したのである。

開校と同時に法文学部支那哲学講座を担当した藤塚は、1940年(昭和15年)の退職まで計15年間講座を続けた。1930年(昭和5年)からは支那語学と支那文学の講座を分担した。1930年~1931年法文学部長に勤めた。藤塚は、時間があれば仁寺洞などにある書店によく足を運び、本を読んでいたが、偶然朴斎家の名前を再び発見することになる。そして朴斎家の弟子である阮堂金正喜が中国考証学の大家である阮元(1764-1849)および翁方綱(1733-1818)と交流があったのを知り、阮堂研究に没頭した。その10年間の研究成果を集め、1936年(58歳)に『李朝に於ける清朝文化の移入と金阮堂⁵⁾』により東京大学の博士学位を取得した。

1940年(62歳)京城帝国大学を退職した藤塚は、日本に戻り大東文化学院の教授になり、1948年(昭和23年、70歳)1月、斯文会理事長、3月には大東文化学院の総長となるが、間もなく12月24日逝去した。幸いに終戦前日本に帰った藤塚は、全ての資料を日本に運ぶことができ、それを大切に保管していた。資料に関しては、韓国の書家の素筌孫在馨(1903-1981)が1944年渡日し、東京の自宅に100日間藤塚を尋ね「歳寒図」(現在国宝180号)を韓国に返してもらった有名なエピソードもある。藤塚の死後、1990年代には子の明直が父の旨を受けて残っている資料をすべて韓国の果川文化院に寄贈した。

藤塚は、どのような人物であったのか。藤塚に関する記録を調べると、「書物」に関する事柄が多い。藤塚の京城帝国大学時代のあだ名は「書痴」であり、銀行から研究資金をもらうまでして本を買い集めたという⁶⁾。また、ソウルの仁寺洞の古本屋で阮堂の作品の価値を上げたのは藤塚だという話もある⁷⁾。

中国哲学の藤塚教授の書齋には、5万冊の蔵書が詰め込まれて、家の中に入ると古書の匂

4) 加藤は、第8高等学校時代の弟子で藤塚の勧誘で中国哲学を勉強し、広島大学および東京大学教授を歴任した。1928年から1933年までは、京城帝国大学の助教授となった。藤塚の死後、著書刊行にも参加した。

5) 博士論文審査は、中国哲学専攻の宇野哲人、中国文学専攻の塩谷温および東洋史(朝鮮史)専攻の池内宏が担当した。のちにこの論文は、子の藤塚明直により『清朝文化東傳の研究』(図書刊行会、1975)として刊行された。

6) 「座談会 先学を語る — 藤塚鄰博士 —」、175頁。

7) 유홍준 『완당평전 (阮堂評伝)』 1、한고재、1991年、59頁。

いであふれていたという。その多くの蔵書と研究の相当数が秋史金正喜に関するものであったが、秋史が単純な書道家や名筆ではなく、金石学者ということを学術的に証明した。藤塚は秋史金正喜と清の阮元・翁方綱との学縁を追跡することによって、清朝経学東伝の様相を明らかにした⁸⁾。

大量の書物は、藤塚が住んでいた韓国の自宅に詰め込まれていた。藤塚は自宅（鐘路区忠信洞）から北漢山を望めるという意味で「望漢慮」と称した。京城帝国大学在職期の藤塚に対して、誠実な学者としての評価⁹⁾と共に、当時ソウルで第一の蔵書家であったことが知られている¹⁰⁾。ソウルの自宅には、中国と韓国で手に入れた膨大な資料があつて学生たちが随時訪問し、図書館にない資料まであることに感嘆したという¹¹⁾。このような記録から、藤塚がいかに清朝文化東伝研究に熱意を注いだかがわかる阮堂研究の業績は、資料収集と研究に誠実に取り組んだ結果であったことが明らかである。

二 藤塚の学的背景と人脈——東京帝国大学を中心に

藤塚が卒業した東京帝国大学の支那哲学科は、1904年（明治37年）、文科大学学科規程の改定により、漢学科が「支那哲学」「支那歴史」「支那文学」に三分化される時期であった¹²⁾。中国哲学科は、島田重禮（篁村、1838-1898）・林泰輔・市村瓊次郎らの考証学的古典学、重野安繹（成斎、1827～1910）・星野恒（豊城、1839～1917）・那珂通世らの文献批判の実証史学を学術の基礎とする一方、洋学を主流とする傾向の強い東京大学にあつて、西洋哲学史の叙述方法を適用することを急務とする時期でもあった¹³⁾。

これに先立つ1885年（明治18年）、東京大学は文学部の和漢文学を改組して漢文学科を独立させ、1889年、東京大学を帝国大学と改組、第一高等中学校以下旧制高等学校の設置を開始、1888年、帝国大学文科大学に国史科を設置、1890年、教育ニ関スル勅語の公布など、古典の重視と新しい研究法が求められていた¹⁴⁾。

8) 李忠雨『京城帝国大学』、多楽苑、1980年、163-4頁。

9) 「塚原氏は天才肌と云ふよりは克己勤勉的な人であらう。……朝鮮儒学の研究者として高橋亨博士と城大の双壁となっている」（岡本浜吉「城大教授評判記」『朝鮮及満州』第354号、朝鮮及満州社、1937年）

10) 「일제 때 서울에서 가장 책을 많이 소장하고 있던 사람이 城大의 藤塚교수, 그다음이 崔南善씨였지요. 세번째가 今西라는 일본인…」(『冊의周邊(1)古書店今昔』『東亞日報동아일보』、1965年9月16日5面) 参考。

11) 戦争で失った資料を除いても果川文化院に遺贈された資料は、書画類70余点、書籍2500余冊、写真などの資料が300余点であった（果川文化院ホームページから抜粋）。

12) 東京大学百年史編集委員会『東京大学百年史』部局史1、東京大学、1986年、511頁。

13) 『東京大学百年史』部局史1、510頁。

14) 江上波夫編『東洋学の系譜』、大修館書店、1992年、74頁；『日本近現代人名事典』、吉川弘文館、2007

藤塚は、このような支那哲学の雰囲気の中で、清朝考証学に学風と近代的な方法論を身につけることができた。東京帝国大学時代の藤塚に学問的な影響を及ぼした人物や深い交流があった人物を上げると次のようである。

1. 星野恒

星野恒（豊城、1839-1917）は、新潟県中心で、明治・大正の間、ながく漢学科の講座担任をつとめた。彼は、1859年（安政6年）江戸に出て塩谷宕陰（1809-1867）の学僕となり、漢学を学んだ。1888年、修史局編修から文科大学に赴任し、帝国大学の教授に任ぜられ、国史学の講座を担任した。1901年（明治34年）、『史学叢説』二巻を刊行しているが、重野の退職後、支那哲学支那史学支那文学第一講座を担当し、漢学科を主宰した¹⁵⁾。前述のように、藤塚は、星野に『皇清経解』の研究および利用について学び、清朝考証学および経学の文献的研究の基盤を作った。その学統は、松崎慊堂（1771~1844）に遡り、安井息軒（1799-1876）・塩谷宕陰（1809-1867）→ 星野恒（1839-1917）→ 藤塚鄰となる¹⁶⁾。

2. 服部宇之吉

服部宇之吉（随軒、1867-1939）は、福島出身で1890年（明治23年）帝国大学文科大学哲学科を卒業した¹⁷⁾。1898年、東京帝国大学文科大学助教授になった服部は、翌年同大学助教授専任となり、清国および独逸国に4年間留学を命ぜられた。1902年8月帰国し、東京帝国大学文科大学教授となり、文学博士を取得した。1902年9月北京に行き、1909年1月に帰国した¹⁸⁾。藤塚が東京帝国大学に在学していた時は、服部が中国に在留していたため、直接に教えることはできなかった。しかし、帰国した服部が1909年の4月から東大において墨子の講義を行い、大学院生であった藤塚は聴講することができた。ただ、それも藤塚が第8高等学校講師になったため、弱半年の短い期間であった。

藤塚は、その後も年に一度か二度は必ず服部の家を訪問し、指導を受けたという。藤塚が1921年北京で経学の勉強をすることができたのも、服部の配慮であった¹⁹⁾。藤塚が渡韓を決心したのも、服部が京城帝国大学の総長として韓国に行く時「支那哲学講義を担当してほしい」という勧誘があったからである。

以上でわかるように、服部の影響は、学問の内容ではなく、藤塚の人生そのものに及んでいた。服部との縁がなかったら、藤塚は北京で朴斎家の名前を知ることもなく、さらにソウルで

年、154頁。

15) 『日本近現代人名事典』、吉川弘文館、2007年、937頁、『東京大学百年史』部局史1。

16) 藤塚明直『『皇清経解』と秋史』『秋史研究』第4号、秋史研究会、2006年、83頁。

17) 『日本近現代人名事典』、吉川弘文館、2007年、832頁。

18) 江上波夫編『東洋学の系譜』、88-89頁。

19) 藤塚明直「服部宇之吉先生と父藤塚鄰」、29頁。

阮堂の研究に没頭することもなかったであろう。

3. 宇野哲人

宇野哲人（澄江、1875-1974）は、熊本出身で、1897年（明治30年）、東京帝国大学文科大学漢文科に入学、島田重礼・根本通明・井上哲次郎らに学び、漢唐訓詁学・清朝考証学・西欧哲学などを吸収し、1900年（明治33年）漢学科を首席で卒業した²⁰⁾。大学院で中国近世哲学史を研究し、1905年から1910年まで清・独両国に留学し、西洋哲学の方法によって中国哲学を体系づけ、はじめて中国哲学の近代的研究法を確立したとされる²¹⁾。1929年、東京帝国大学文理科大学が創設するとともに教授になり、1936年（昭和11年）定年退官した。

宇野は、藤塚が阮堂について博士論文を書くことになった最大の功労者である。元来藤塚は、博士論文を書くつもりもなく、まして阮堂研究を行うとは思っていなかった。むしろ藤塚の弟子であった加藤常賢の方の提出が早かったほどであった²²⁾。宇野は、定年になる前にぜひ藤塚に学位をとってもらいたいということで、数年前から学位論文の催促をしていた。最初藤塚は『論語』を念頭に置いていたが、宇野は朝鮮にあつて朝鮮のことを熱心に勉強しているので、それをまとめるべきだと言い、「李朝に於ける清朝文化の移入と金阮堂」の博士論文提出となったのである。審査委員の一人であった池内宏は、藤塚の論文を読み、清朝考証学に精通していると感服しという²³⁾。

また、宇野の子宇野精一（1910-2008）は、藤塚が東方文化学院の研究所に評議員として在職する際に教えを受け、『清朝文化東伝の研究——嘉慶・道光学壇と李朝の金阮堂』（国書刊行会、1975年）の出版にも参与し、序文を書いている。

4. 加藤常賢

加藤（維軒、1894-1978）は、愛知県の出身で、第八高等学校時代の藤塚の弟子である。加藤は、藤塚に漢学を学び、東京帝国大学進学の際には、藤塚の紹介を通じて東京大学の先生を紹介してもらった²⁴⁾。加藤も、宇野哲人に博士論文を見てもらった。加藤は、高田真治の後任として京城帝国大学の助教授になり、1928年渡韓した。その経緯は、藤塚から是非来てほしいと要請され、また服部からも進められ、やむを得ず単身で赴任した。京城での経験は自分に「学問のスタート」だといい、『書経』を調べ、金石文などの研究を始めた²⁵⁾。日本に戻ってから、広

20) 江上波夫編『東洋学の系譜』第2集、1994年、74頁、『日本近現代人名事典』、154頁

21) 江上波夫編『東洋学の系譜』、76頁。

22) 加藤常賢外「座談会 学問の思いで——加藤常賢博士を囲んで——」深津胤房編『維軒加藤常賢——学問とその思い出』、川崎：加藤さだ、1980年、221頁。

23) 「座談会 先学を語る——藤塚鄰博士——」、169-170頁。

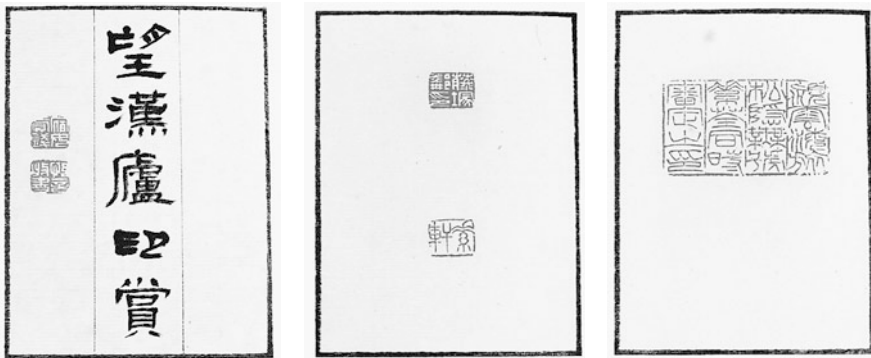
24) 加藤常賢外「座談会 学問の思いで——加藤常賢博士を囲んで——」、187頁。

25) 加藤常賢外「座談会 学問の思いで——加藤常賢博士を囲んで——」、202頁。

島大学教授を経て、1947年の高田眞治の退職後、東大中国哲学科教授となった。

加藤の他、第八高等学校時代に藤塚に漢学を学んだ人は、国史専門の東大名誉教授になった坂本太郎（1901-1987）、支那哲学専門で東北大学の名誉教授で会った吉田賢抗などがある。このように、藤塚が八高に在職した時期に東大の支那哲学・文学では八高出身が多く、「八高閥」という俗称があるほどであった²⁶⁾。

他にも、京城帝国大学時代の同僚であった鮎貝房之進（1864-1946）は、自分が集めた阮堂の資料を渡し、藤塚の研究を励ましてくれたという²⁷⁾。また、鄭寅普や崔南善などの韓国の碩学および近代韓国の著名な鑑識家たちとも交流をしていた。



【写真2】印譜集『望漢廬印賞』〈15×7.5cm〉²⁸⁾

この写真は、藤塚の印譜集『望漢廬印賞』である。真ん中の上には、藤塚の名前が、その下には藤塚の号素軒の印が押されている。左には、左上から穎雲（金容鎮）、海旅（林尚鍾）、松隱（李秉直）、無號（李漢福）、素筌（孫在馨）など当時の最大の鑑職眼の印が押されてある。この印譜集から、藤塚が当時の書画専門家たちと交流していたことがわかる。

三 藤塚の在朝経験——京城帝国大学時代を中心に

1. 藤塚と他の教授陣

前述のように、藤塚は1926年から1940年まで15年間京城帝国大学で中国哲学を講義した。1930年に作られた極東文化研究機関である青丘学会の機関紙『青丘学叢』には、1931年から1936年までの京城帝国大学の講義目録を載せているので、当時の講義の一部を確認することができる。

26) 「座談会 先学を語る——藤塚鄰博士——」、181頁。

27) 藤塚鄰「槐園先生と私」、桜井義之『書物同好会会報』附冊子、龍溪書舎、1978。

28) 写真は、秋史金正喜ホームページ (<http://choosa.or.kr/>) から抜粋。

そのうち藤塚が担当した講義名は次のようである。

【表 1】京城帝国大学支那哲学科講義名²⁹⁾

年度	講義名
1931年	支那哲学史概説、支那哲学演習
1932年	支那倫理学概説、清朝経学史、支那哲学演習：論語正義
1933年	支那倫理学概説、清朝経学の研究（主として論語学）、詩経購読演習 ³⁰⁾
1934年	支那倫理学概説、李朝に於ける清朝文化の移入、演習（清代経師論集）
1935年	支那倫理学概説、李朝ニ於ケル清朝文化ノ移入
1936年	支那倫理学概説、李朝ニ於ケル清朝文化ノ移入

これにより、1934年から「朝鮮に於ける清朝文化の移入」という講義名が持続的に登場することがわかる。これは、1936年の博士学位取得直前で、彼の博士論文の構想をそのまま反映させていた講義だったはずである。また、倫理学概説を毎年開設したのも注目される。

支那哲学科には、教授は藤塚一人、ほかに助教授を一人の体制を取っていた。1927年に助教授となったのは、東京帝国大学支那哲学科を卒業（1917年）した高田眞治（1893-1975）である。高田は、1925年から1927年まで京城帝国大学の予科の教員として在職していた。のちに、高田は東大の助教授となり、1930年から1948年まで中国哲学中国文学第一講座を担当した³¹⁾。

高田の後任は、加藤常賢である。加藤は、第八高等学校卒業、東京帝国大学文学部支那哲学科を卒業（1920年、大正9年）した藤塚の弟子であった、加藤は、1928年から1933年まで京城帝国大学法文学部に助教授として在職している。「京城帝国大学法文学部講義題目」によると、1932年には「後漢の経学、支那哲学演習（周礼注疏）」を講義、1933年には「支那哲学史概説、演習（尚書古文疏証）」を講義した。加藤も1947年、東京帝国大学の支那哲学科の教授になる。

加藤の次に助教授になったのは後輩の本多龍成³²⁾であり、1935年から1940年まで京城帝国大学法文学部に助教授として在職している。本多は、1935年には「清朝経師論集、支那哲学史概説、演習（尚書注疏）」を講義した。

1940年、藤塚が定年退官するとともに阿部吉雄（1905年-1978年）が助教授として赴任し、終戦で廃校になるまで務めた。李退溪の研究者として広く知られている阿部は、1928年に東京帝国大学文学部支那哲学科を卒業し、1930年には東方文化学院東京研究所で服部の助手を務めていた。阿部が京城帝国大学に赴いたのは、いわば、服部と藤塚の関係の延長戦であった。服部

29) 「京城帝国大学法文学部講義題目」『青丘学叢』第8号以下、青丘学会。

30) 藤塚は、1932年と1933年に支那文学講座も分担していた。

31) 『東京大学百年史』部局史1、514頁。

32) 本多龍成は、藤塚の第八高等学校時代の弟子である。彼は、1923年に第八高等学校に入学し、1926年卒業後東京帝国大学の支那哲学科に入学した。

と藤塚を中心とする東大の支那哲学科との深い繋がりを見ることができるであろう。

2. 受講生

それでは、藤塚を筆頭とする京城帝国大学の支那哲学科で講義を受けた学生はどのような人々であったろうか。1941年発行の『京城帝国大学一覽』から支那哲学科の卒業生を調査したのが次の表2である。

【表2】京城帝国大学支那哲学科卒業生³³⁾

卒業年度	韓国人 (出身)	日本人 (出身)
1929年	趙容郁 (全北)	/
1930年	金亨喆 (黄海), 廉延権 (京畿)	若山 尚 (大分)
1931年	/	田中一郎 (東京) ³⁴⁾
1932年	閔泰植 (忠南) ³⁵⁾	小竹武夫 (石川) ³⁶⁾
1934年	/	庄司秀一 (宮城) ³⁷⁾
1935年	/	松村宣夫 (山口) ³⁸⁾
1937年	金永起 (京畿) ³⁹⁾	/
1938年	李根雨 (京畿)	/
1939年	金龍培 (京畿)	/
1941年	/	池田實 (宮城)
計	7名	6名

1929年から1941年に至るまで支那哲学科を卒業した学生は、韓国人7名・日本人6名で計13名である。これまでの調査によると、1929年卒業の趙容郁(1902-1911)の場合、梨花女子大学教授および同徳女子大学の学長を歴任し、漢文を講義した。金亨喆は、卒業後に驪州女子高の校長となる。1932年卒業の閔泰植(1903-1981)は、ソウル大学・忠南大学・成均館大学に在職し、その同期である小竹武夫(1905-1982)は、兄の小竹文夫(1900-1962)とともに『史記』

33) 1933年および1938年には支那哲学科の卒業者がいなかった。

34) 論文として「荀子研究」(「京城帝国大学法文学部卒業論文」『青丘学叢』第4号)がある。

35) 論文として「陳澧及其治経方法」(「京城帝国大学法文学部卒業論文」『青丘学叢』第7号、1932年2月)がある。

36) 論文として「支那目錄学の発達に就いて」(「京城帝国大学法文学部卒業論文」『青丘学叢』第4号)がある。

37) 論文として「支那上代に於ける忠孝論の起源及び発達」(「京城帝国大学法文学部卒業論文」『青丘学叢』第15号、1934年2月)がある。

38) 論文として「阮元之文化的工作」(「京城帝国大学法文学部卒業論文」『青丘学叢』第19号、1935年2月)がある。

39) 論文として「清朝経学史上に於ける高郵王氏の位置」(「京城帝国大学法文学部卒業論文」『青丘学叢』第27号)がある。

を全訳し、『漢書』を訳すなど卒業後日本で活発な学問活動を行った。1939年卒業の金龍培（1895-1961）は、東国大学に哲学科を設置した人物である。

卒業者の趙容郁と閔泰植は、漢文の実力が相当あったと言われている。閔泰植は、漢詩や書道にも造詣が深く、予科の多田正知から閔先生と言われたというエピソードがある⁴⁰⁾。閔泰の卒業論文は、藤塚が日本に持ち帰った。藤塚の研究室にあったものは、空襲によって大部分燃えてしまったが、幸い閔泰植の論文は無事に残り、子の明直から1977年返還してもらうことができたという⁴¹⁾。1934年卒業の庄司秀一は、京城帝国大学時代3～4年間助手としていた。卒業論文は「中庸に対する疑問説に就いて」だったとされる⁴²⁾。

藤塚鄰の韓国における活動についてはより線密な調査が必要であるが、京城帝国大学が戦後ソウル大学に編入されたことと、支那哲学科卒業者が韓国の第1世代の中国哲学の研究者および教授として活動したことから、韓国の中国学研究における藤塚の影響を見ることができるであろう。

おわりに

以上、京城帝国大学の支那哲学講座を担当した藤塚鄰の生涯および学脈について検討した。藤塚は、1926年の開校から1940年の定年退任まで支那哲学講座を担当し、京城帝国大学の支那哲学講座を代表する人物だといえよう。しかし、これまで京城帝国大学に関する研究は、朝鮮語・朝鮮文学講座の教授や歴史講座の教授に集中してきた傾向があった。従って、支那哲学講座とその教員・学生についてはほとんど注目されていなかった。本稿では、藤塚鄰という人物に着目し、近代韓国学術史で中国哲学の一面を見ようと試みるのである。

藤塚が近代中国哲学の形成において重要な理由は、京城帝国大学が当時の学術を主導し、そのような大学の中国哲学研究の中心にいる人物が彼であったからである。彼は、東京帝国大学で伝統的な漢学と西洋の学問方法による近代的な学問としての中国哲学の両方を身に付け、中国で滞在しながら清朝経学研究を深めた。このような経歴は、以降韓国での研究の基盤となったのである。誠実な研究家で、誰よりも多くの資料を収集していた藤塚は、韓国という特殊な地域性を生かして活発な研究活動を行い、元堂研究および清朝文化伝来に関する優れた業績を残した。

当時、藤塚が中心となっていた京城帝国大学の支那哲学科には、彼の人脈により東大学派を教員として招き、高い水準の授業を行った。その時の助教授であった高田と加藤は、以降東京帝国大学の教授となった。このように、藤塚により構成された支那哲学講座のカリキュラムと

40) 李忠雨『京城帝国大学』、74、130頁。

41) 李忠雨『京城帝国大学』、154頁。

42) 「座談会 先学を語る — 藤塚鄰博士 —」、170-171頁。

学問方法は、当時の東京帝大で流行っていた新学問の風潮と緊密にかかわっていたのである。

藤塚が京城帝国大学で行った支那哲学講座のカリキュラムおよび卒業生の活動から、藤塚が京城手国大学で行った支那哲学教育の一断面を見ることができた。本稿では触れていないが、藤塚だけではなく、加藤や高田など助教授として勤めていた人々のことや、京城時代における彼らの活動などから、より具体的な様子を見ることができるであろう。また、藤塚が構築した体制と学問風潮が戦後どのように継承されたか、ないしは断絶されたのかについて明らかにする必要があると思われる。これから研究課題として研究を進めていきたい。